

2016 干し柿シンポジウム in TOYAMA の企画と開催報告

元富山県立大学短大部 林 節 男

1. はじめに

富山県を含めて、東北から南九州まで多くの府県で、柿の栽培は庶民の生活樹として、江戸時代から、生食の他に干し柿や、柿の葉茶、柿渋などとして日常生活に結びついて親しまれ、植えられてきた。

生産団体と行政機関が中心になり主要生産地で2年おきに、柿の栽培について、情報交換の為に、大会が開催されているが、干し柿加工に関しては、大きな生産地以外では、情報交換などの大会は開催されていないようである。今回、干し柿に関する現状や科学的知識を整理して将来につなげるための第一歩として、多くの関係者や団体に呼びかけてシンポジウムを企画し、平成28年10月2日(日)富山県砺波市の散居村ミュージアムで開催した。開催にあたり、富山県農村医学会などから財政支援を受けた。

2. シンポジウムの開催趣旨

日本各地の干し柿生産地では、生産者の高齢化と生産戸数の減少により、何れも生産技術の継承が大きな課題になっている。また、近年の気候変動の一側面である収穫から乾燥時期の高温・多雨により、製造工程でカビが発生するなど品質に影響が及んでいる。一方で、伝統的な「和食」が世界遺産として認定され、学校教育においても、地域の食材を生かした「食育」が重要視され、実施されている。本シンポジウムでは、持続的な干し柿生産をめざして、今日における課題を、各方面から話題提供して頂き、討議した結果を、生産者、地域行政、流通業者、消費者に届けることを目的とした。

3. シンポジウムのキーワードとセッション開設

キーワードとして、今日的な課題である干し柿生産の継承、柿の多様な活用、地域おこし、温暖化対策の4語を掲げた。

発表参加者について、干し柿生産組合、干し柿づくりの継承に尽力の生産者、柿果実の成分研究者、柿渋の専門家、気象の専門家、農業生産における事故の研究者、地域おこしの活動家、レストラン経営者等に呼びかけた。

発表者を3部門のセッション(①干し柿生産の現状と継承および気候への対応、②となみ野の人と自然と生業、③地域おこしと柿の多様な活用にむけて)に区分して、シンポジウムを幅広いものに企画した。結果的に13名の発表者の参加を得た。

4. 共催団体と後援団体への呼びかけと応諾について

従来から林と親交のある関連団体から、幅広く共同と協力を呼び掛けた。結果的に、共催団体として富山干柿出荷組合連合会、美味技術学会、タイワ精機(株)、兼八産業(株)、日本海調温(株)、富山県農村医学研究会、となみ散居村ミュージアムから共催支援を得た。

後援団体として富山県、南砺市、JAなんと、JA福光、富山県立大学、南砺市観光協会、砺波カイニヨ倶楽部、菜園レストラン「薪の音」、農家レストラン「大門」、なやかふえ、北日本新聞社、北陸中日新聞社、読売新聞北陸支社、NPO富山湾を愛する会、美濃加茂市、堂上蜂屋柿振興会、JA羽茂、富山県花卉球根農業協同組合、今庄特産柿振興会、NPO法人「きんたろう倶楽部」、農

山漁村文化協会から参加を頂いた。

5. 開催準備と情宣チラシ作り

報告者である林は、数年前に大学を定年退官していたが、勤務していた大学と連携しての開催準備が可能であった。近年の制度であるCOCなど大学と地域のつながりを重視する制度を活用した。富山県立大学の学生サークル「水土里保全研究会」18名がスタッフとして参加し、自分たちの活動発表の場を兼ねて、開催準備に参加した。シンポジウムの情宣チラシに、開催地の散居村の描画を得意とするイラストレーター(吉水友香氏)に図1の和やかな干し柿づくりの挿絵を描いて頂き、一般の方からも注目を集めた。

6. 参加者とタイムスケジュールについて

干し柿生産団体として富山27名、福井県7名、県立果樹試験場関係として、福島、福井、富山の各機関から申込とポスター展示を得た。干し柿作りを教科にしている岐阜県と富山県の農業高校からも、参加申込とポスター展示を得た。発表者13名と実行委員7名、学生スタッフと当日参加者も含めて、総勢90名近くの参加となった。

実行委員会と司会進行、音声起稿、チラシ挿絵、学生スタッフについて、以下の様に構成した。

代表 林 節男(元富山県立大学短大部)
副代表 仲筋英生(富山干柿出荷組合連合会会長)
会計 後藤清和(美味技術学会役員)
会計 窪田謙治(前富山干柿出荷組合連合会理事)
高井芳樹(タイワ精機㈱ 会長)
成川栄一(タイワ精機㈱ 常務取締役)

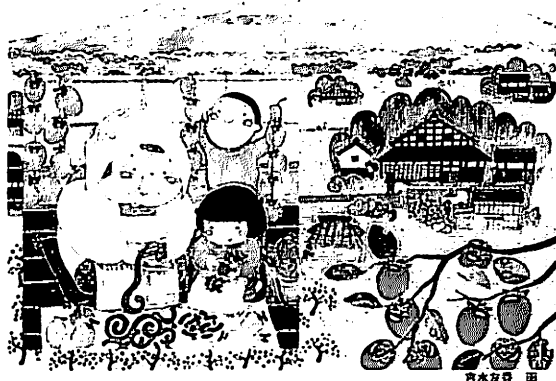


図1. 情宣チラシの挿絵

田中敏晴(タイワ精機㈱ 研究部長)

司会進行 相本芳彦(フリーアナウンサー)

音声起稿 山岡純子(山岡音声起稿事務所 代表)

チラシ挿絵 吉水友香(イラストレーター)

学生スタッフ 富山県立大学 水土里保全研究会

当日のタイムスケジュールについて、以下の様に編成した。

タイムスケジュール：赤字は追加部分(情宣チラシに追加部分)

10:30～

開会宣言 相本芳彦(フリーアナウンサー
シンポジウム全体の司会進行を務めます)

開会挨拶 高井芳樹(実行委員会 タイワ精機㈱会長)

来賓あいさつ 作井英人(富山県農林水産部次長)

祝電の紹介 南砺市長から

シンポジウムの趣旨と進行について

林 節男(実行委員会 元富山県立大学短大部)

(実行委員会と司会者、音声起稿者、学生スタッフの紹介)

各発表時間 ◎印のみ：20分、他は15分(予鈴：2分前に1鈴、1分前に2鈴、終了時に3鈴)

11:00～12:50

セッション1；干し柿生産の現状と継承および気候への対応

◎仲筋英生(富山干柿出荷組合連合会会長) 題目「富山の干し柿生産に50年余り関わって」

原 敏夫(兼八産業㈱会長) 題目「全国各地の干し柿生産地に機械を届けて」

◎岡田 宗(気象情報通信㈱調査役 気象予報士) 題目「温暖化傾向と晩秋の気候」

金山正尚(南砺市土生新 干し柿生産者) 題目「天日と医王おろしを活用した干柿作り」

窪田謙治(南砺市高宮 干し柿指導者)、福光東部・南部小学校の教諭・児童

題目「20年間余り、児童たちに干し柿生産を伝え、児童たちが学んだこと」

林 節男（元富山県立大学短大部） 題目「日本と東アジアの気象条件と干し柿生産を調査・視察して」

3県の取組み 福島県：國分計恵子（福島県農業総合センター 流通加工科）

（各5分以内） 福井県：中川文雄（福井県園芸研究センター）、澤崎信雄（今庄特産柿振興会） 富山県：坂田清華（富山県農林水産部農産食品課）

質疑応答

12：55～13：30 昼食+交流

13：40～15：00

若者からの報告（3校から5分以内）

ダルモマイケル（岐阜加茂農林高校）：堂上蜂屋柿の振興策を取材

金子衣里・田中 萌（南砺福野高校）：教科として富山干柿の加工体験に取り組む

白谷周作（富山県立大学 水土里保全研究

会）：ふく福柿の収穫支援など

セッション2：となみ野の人と自然と生業

◎勝野那嘉子（岐阜大学助教、美味技術学会員）

題目「干し柿の成分変化と美味しさ」

天野一男（砺波カイニョ倶楽部事務局長） 題目「散居村の人、景観、資源」

太田浩史（南砺市大窪 大福寺住職） 題目「福島県南相馬の天明飢饉を救った富山柿－文書報告－」

大浦栄次（富山県農村医学研究所） 題目「干し柿生産作業における事故とその対策」

質疑応答

15：20～16：30

セッション3：地域おこしと柿の多様な活用にむけて

◎今井敬潤（岐阜女子大学非常勤講師） 題目「柿の栄養成分と柿渋などの多面的な利用」

坂井智子（南砺市大塚ログログファーム） 題目「若手女性のコラボによる干し柿チョコレート作り」

016年(平成28年)10月3日 月曜日 北日本新聞

干し柿生産の課題などを考えたシンポジウム



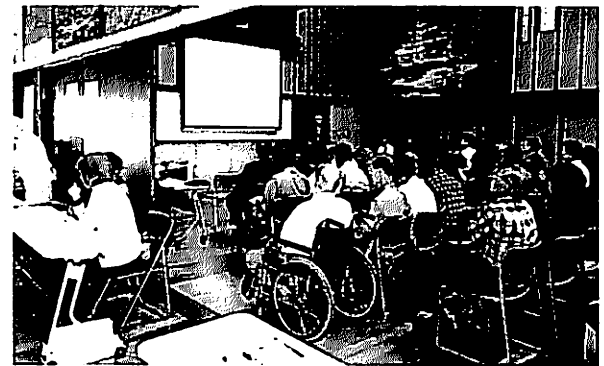
干し柿生産 課題探る

県内外70人意見交換

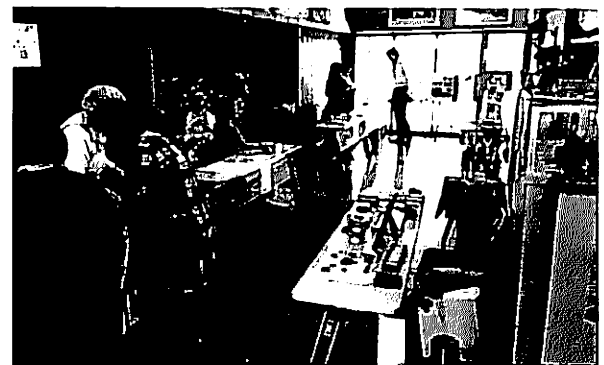
【富山】「2016干し柿シンポジウム」が2日、砺波市のとなみ教育センターで開かれた。県内外の干し柿生産の関係者ら約70人が、生業の振興や柿の活用方法を考えた。【webunに伝えます】県内の干し柿生産の関係者ら約70人が、生業の振興や柿の活用方法を考えた。【webunに伝えます】

レトやアイスクリームなどの加工品をアピールした。干し柿の生業振興の風や加工品の試食もあった。北日本新聞社後援

翌日（10月3日）北日本新聞 記事



会場の様子



干し柿関連の展示販売コーナー

翌日の新聞報道と会場内外の様子 展示販売も

山本誠一（南砺市野口 薪の音代表） 題目「干し柿を2次加工して、高級和菓子へ」

林 節男（元富山県立大学短大部） 題目「柿渋染めの試行と可能性」 実物とポスターの掲示

質疑応答

16:40～17:00 まとめと閉会挨拶 仲筋英生（実行委員会 富山干柿出荷組合連合会会長）

17:10～17:30 敷地内のあずま立ちの“伝統館”の案内（天野一男氏 となみカイニョ倶楽部事務局長）

17:30～ 夕食交流会（会場敷地の“交流館”「現代風のあずま立ちの家屋で伝承料理」 定員40名、3000円）



干柿出荷組合長 仲筋英生氏



干し柿指導者 窪田謙治氏



気象予報士 岡田 宗氏



水土里保全研究会



岐阜県加茂農林高校



富山県福野高校



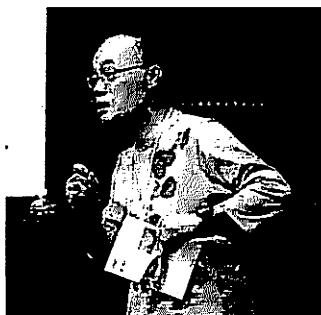
柿渋研究 今井敬潤氏



「薪の音」代表 山本誠一氏



チョコレート加工 坂井智子氏



柿渋Tシャツ 林 節男

7. まとめと今後の課題について

従来、干し柿の生産技術については、秘伝的な要素もあり、必ずしも地域間交流は十分でなかった。

今回、各地で苦勞されている干し柿生産者の切実な声を聴くことが出来た。干し柿生産に加え、地域おこし、多様な活用、温暖化対策も対象にし、多角的なシンポジウムが実現した。高校生や大学生の若者から、年輩の生産者まで、各年代の参加

と報告を得た。

フリーアナウンサー、音声起稿者、イラストレーターとの協働も、功を奏したと思う。

富山県農村医学研究会や美味技術学会と富山干柿出荷組合、関係団体などから開催支援を受けて盛会になった。

今後、このシンポジウム成果を全国各地の干し柿生産地に如何に広げ、継続し発展させることが課題になる。